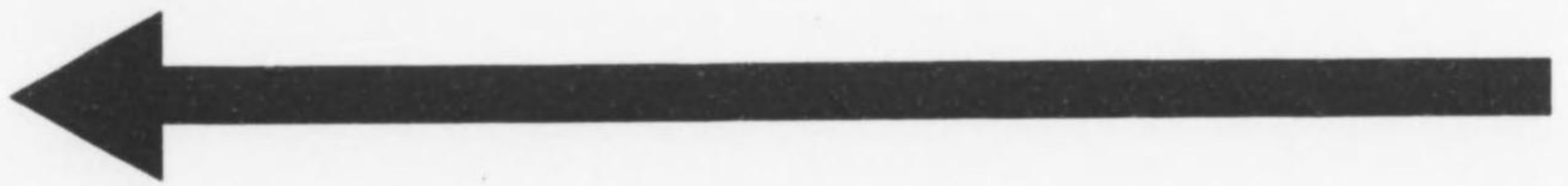




文
机
談
解
說



始



文机談解説

今こゝに影印するところの文机談は、菊亭侯爵家に襲藏せられ、現在は京都帝國大學附屬圖書館に寄託せられてゐる古鈔本である。本書は往年珍書同好會によりて謄寫版をもつて公刊せられ、大いに學界に資するところがあつたが、轉寫の際の誤謬などもかなり多くあつて、甚だ遺憾とせざるを得なかつた。然るにこの菊亭本が発見せられ、それが最善の書でないにしても、多くの缺陷を補正することを得るやうになつた。乃ちこゝにこれを複製して一はもつて珍籍の影本を残し一はもつてこれを學界に提供する所以である。

この菊亭本は家傳では著者隆圓の自筆と稱し、徳川末期頃の紙片に紙背消息の中に隆圓自筆二行を交ふるよしを述べてゐるものが挿入せられてゐるが、兩者ともに確證のあるではなく、已刊本と同じく隆圓の文永年中の後序を最終とし、更に書中往々にして誤寫と覺しきところの存するをもつて見れば、これを隆圓自筆本といふことは賛成しがたい。しかし原書からあまり遠くは隔たらないと推定せられる古鈔本であつて、紙背にはその時代を髣髴せしむる消息を交へてゐるが、明瞭なる年記を缺き、記事も斷簡であつて事情をも明かになし得ない、又筆者中には行圓などの名も見えるが、何人とも定め得ないことを甚だ遺憾に思ふ次第である。



さて文机談とは如何なる書であるか。著者隆圓とは如何なる人であるか。それらについては嘗つて大正六年四月に前述の珍書保存會本の刊行せられるに當つて斯界の權威者たる和田英松先生が執筆せられた解説が巻頭に載せられてゐるものを、今回先生の諒解を得て左に全文を引用して徒らに同意異文を綴ることを避ける事とする。隆圓の傳記は二昔を過ぎた今日未だこれを詳かにするの資料が発見せられぬやうである。

この書は、文机房隆圓の著なり。文机談とは、文机房の物語を記したる意にして、大江匡房の談話を筆録したるものを江談といひ、富家關白忠實の口授を書きとりたるものを富家語談と稱したるに同じ。

この書は、後崇光院の看聞御記に、四絃相承附屬の書たるよし記し給へるが如く、主として琵琶の流派、相承、及び名手の逸事等を記したるものなり。殊に著者隆圓の師、孝道一流の傳統に就いては詳悉をきはめ、また琵琶の起原傳來、及び其名器の來歴等をも述べ、其他箏笛等の樂器、今様、催馬樂等の歌謠に關する事をも載せたり。されば、この書は平安朝より、鎌倉時代中期に至る音樂、特に琵琶に就いての歴史を考究するには最も重要な史料なり。

この書は、著者の跋文に「六卷の巻軸に載せて具に相承の次第を擧ぐる所なり」と見えれば、もとは六卷ありしが、今世に傳はれるものはきはめて稀に、柳原本は五卷あり。但し卷二

以下は、各初末の二冊に分ちたれば合せて九冊なり。卷一も、卷の始缺逸したれば、もとは初末の二冊ありしが、今は末の卷一冊のみ傳はりしものか。また四の末、及び五の末にも、缺けたるところあり。三の末四の初には、處々に脱簡あり。五の末尾には一本を以て補ひたるものさへあれば、完備せるものにはあらず。殘闕にして脱漏鈔からざるものなり。なほ、看聞御記應永廿八年六月十四日の條に引載せられたる、

人にもゆるされて、人の師をもつとむる程の仁は、返々ありかたき物なり、人の御師かたのやうに傳へたれば、とても叶はぬ事也、眞言灌頂大阿闍梨、秘曲傳受の大人の師、大寺の長老、これらていの事は、内縁のあれば、人の吹擧すれば、又あなづりやすければなど思ふべき事にはあらぬとかや、

(筆者附註、今次宮内省圖書寮より刊行せられたる同御記を拜見すると十九日の條に「抑文机談ト云四絃相承付屬事書たる抄物披見」として右の文を載す)

の一節は、柳原本に缺けたるを以ても推知するを得べし。この頃、伏見宮御藏本文机談を拜觀するに、卷一にこの文あり。同御藏本も、缺逸多く、僅に存せるは二卷のみなりき。いづれも南北朝末の古鈔本にして、一卷は觀應元年十二月、及び文和四年正月より十一月までの假名曆を繼ぎて、その紙背に卷一の終と卷二とを記し、一卷は觀應二年秋の假名曆の紙背に卷二の一

部分にして甚しき異同を記せり。これを柳原本と対照するに、互に異同出入あるのみならず、文章もまた詳略一ならざる所多し。蓋し一は稿本にして、一は修正せしものなるが故なるべし。

此書首巻缺けたれば、明ならねど巻五の末尾の文によれば、著者隆圓は、一夜仁王堂に詣でしが、中川のはとりなる尼の請によりて、琵琶の相承、其他の事どもを語り聞かせたるさまに作りなせるものにて、彼大鏡などの體にならひしものならんか。尼の詞に「げにしけき世繼の物語、又紫式部が日記、名のみ高くて、いつはりあいまじはれり、今日の御物語驚のみやまの心ちして、まかりうく侍るかな。」といひて夜のしらむ程に、かきつけやうにうせられたれば、隆圓も語りくたびれて、其まゝ仁王堂にふしたるよし記せり。

この書のなりしは、巻末にそへたる隆圓の跋文に「文永中癸亥第三日雨中抄之了、机案沙門隆圓花押」とあれば、龜山天皇の御代のものなるが如し。されど、卷一西國寺一切經の條に、後深草天皇を本院、龜山天皇を新院と記し、五末の卷に「文永第四のころかどよ、新院の御位の時。」と記し、二初巻には、弘安六年御輿振の事見えたれば、後宇多天皇の御代の末に成りしものなり。然るに、跋文には、文永年中とありて、年代のあはず、蓋し、跋文は、初稿の際に附せしものなるべく、文永以後の事の見えたる今の本は、其修訂を経たるものといふべきものか。

著者隆圓は、いかなる人か詳ならねど、本書によりて其事蹟を考ふるに、參河の人にして、十四五歳の頃、或る山寺に入りて出家したりき。父母この世を去りて後、國々を修行しありきしが、寶治二年の頃、琵琶師孝時入道の第に寄寓しぬ。隆圓書を善くし、文筆に長じたるを以て、孝道多く斯道の書を書寫せしめたりき。常に文机にむかひて、書寫のみを事としたれば、孝道の門人等、これを文机房と呼びたりといふ。其他、本書に有職の道にくらしといひ、記録にうすき身と記し、六義にうとく、密教にくはしからずなど見えたる外には、擧ぐべきものなく、他の書にも徴すべきもの見えず。其名の世に知られざりしは、この書の傳本、世に少かりしが故にてもあらんか。

文机談の諸傳本については已に和田先生の解説中に伏見宮家本が記されてあるが、未だ眼福を得てゐない。又高野辰之博士が柳原本系統の一本を所藏せられてゐるが、多小正誤すべきところある程度のもと同先生より教示を受けた。その他には寡聞ではあるが更に傳本あるを知らぬ。殘缺は今尙殘缺のまゝである。完本の發見せられるの目を希望して止まぬ。

今この菊亭本と珍書保存會本即ち柳原本とを對校して見たところ、全くその系統を一にし、内容も全く同一であり、虫損不明の箇所も全然一致し、柳原本に此間落丁とあるところは菊亭本には附箋してある等明瞭に柳原本の原書となつたものはこの菊亭本であることを知り得たのであ

る。今一々校正の跡を示しかねるが、主なる二三の脱落を補うて見ると、珍書保存會本第二冊第十九丁第三行の「御詠に達せざる」に續いて「よし孝道は申けりやなきのゑたもふちのゑた」の一句、同二十五丁第六行の「申すことにて」に續いて「侍に催馬樂にかきりてさのみ違へきにあらず」の一句、同四十五丁第五行の「入させ給て」に續いて「つねに御ゑん行道そありける物をきたなませ給て」の一句の挿入すべきものがある。

最後に印影上について説明を要することを一言しなければならぬ。影印本は多少縮寫した。原本は豎一尺三分、横八寸の大冊で斐紙の袋綴である。表紙は保存のために表裏に各一葉を新添した。即ち表表紙に於いては菊亭家藏書の印を捺してあるのが原表紙で、裏表紙に於いては汚損の跡の見える紙面がそれである。綴法は勿論原本のまゝに紙捻を用ひた。書中に於いて朱書を用ひてある箇所その他は大體印刷の濃淡によつて想像せられるが、念のためにこれを述べると上部に記されたる見出しの事書、書出しの合點、(中間にも人名に時々合點あり)、目次の合點は朱書で隨所に表丁上部に「此間落丁」とあるは何れも附箋、又文中處々に黒く墨損の如く見え、時にはそれが文字の上に蔽うてゐるのは藍紙又は褐紙の小片が粘布せられてゐるのである。又第四冊の第二丁は珍書保存會本では卷末に添へられた一葉であるが菊亭本にはそれが影寫せられてこゝに綴込まれてゐるのである。又第二冊の第四丁は紙背の消息を披見するの便を計つて裏丁に於いて

紙片をもつてこれを繋ぎ、表丁は遊離せしめてある。更に影印本保存のために新に帙を製し、表紙の外題をこゝに寫した。蓋し原本の容匣は粗末なる杉製にして、表に隆圓自筆と肩書せられてあるが、あまり古いものではないので、模造するに及ばなかつた。同匣中には徳川中期頃の筆寫に係る副本が一部同藏せられてゐて、それは珍書保存會本に載せられたる元祿十四年右大將の議語が記されてある。

本解説に當つて和田英松先生の厚情と教示とに感謝の意を表す。

昭和十年七月

鈴 鹿 三 七

303
6
5

終